静岡発 こう読む

「効率主義」の帰結？

▶▶▶加藤　裕治

書店で気になるタイトルの本を見つけた。「映画を早送りで観る人たち　ファスト映画・ネタバレ―コンテンツ消費の現在形」（稲田豊史著、光文社新書）。最近、Ａｍａｚｏｎの映画ノンフィクションカテゴリでベストセラー第一位にもなっている。タイトルに書かれているような現象を気にしている人が多いようだ。

私も講義内でアンケートを実施したのだが、八十名ほどの出席者のうち、映画などの動画を倍速視聴することがあると答えた学生さんは約七割。そのような視聴は、すでに当たり前になっている。

とはいえ、こうした視聴習慣の変容を論じて何の意味があるのか。個人の自由ではないのか。だが、著者は問いかける。人々は映画を観るという娯楽においてさえ、なぜこんな慌ただしい視聴をするのか。

本書は、多様な側面からアプローチして解答を出そうとするのだが、私が注目したのは「効率主義」という指摘だ。著者によれば、例えば二時間の映画を二時間で観ると「罪悪感」を感じてしまう人がいるらしい。要は「面白かった」よりも、「こんなに時間を使っちゃった」という気持ちになってしまうという。だから彼らにとってつまらないシーン、無駄と思うシーンは飛ばしたい。できることなら、映画の視聴前に、この映画が「私にとって観る価値があるのか知りたい」。今や、娯楽にも「効率主義＝無駄をなくし目的に到達したい」の価値観が入り込んでいるというのだ。

本書は学術書ではないので、厳密な実証性があるわけではない。だが「効率主義」の原則が、経済領域だけでなく、娯楽や人生の在り方にも広がっているのではないか。本書のメッセージはこの点にある。

さて、目的に最も効率よくたどり着くことを突き詰めるとどうなるのか。例えば話し合いで粘り強く解決しよう、といった主張はまどろっこしく感じられるだろう。その果てに現れるのが「力で解決だ」の発想であり、その帰結がウクライナの現状なのではないか。読後にそんなことを考えた。

（静岡文化芸術大学教授）

2022 年 5 月 29 日
中日新聞（朝刊）p.5